

学 位 論 文 題 名

日本書紀における中国口語起源漢語の訓読

学位論文内容の要旨

第一章では、研究の目的と方法を述べる。まず、第一節で、『日本書紀』中の主として中国口語起源の二字漢語を取り上げて、それらの箇所が平安時代以来の『日本書紀』訓点資料でどのように訓まれているかを解明することが目的である。

次に第二節では、先行研究に関して、『日本書紀』古訓が中国訓詁学上からも正確であることを指摘した神田喜一郎、漢文訓読資料としての研究を行った築島裕と石塚晴通、中国口語史研究としての価値を明らかにした松尾良樹等の研究等を紹介し、『日本書紀』本文に使われた中国口語と訓読との関係を全面的に論じた研究がないことを指摘する。

第三節では、研究の方法について、二字漢語を、便宜、漢文法の名詞・動詞・副詞・連詞（接続語）に分けて記述することを述べる。松尾良樹『『日本書紀』と唐代口語』（『和漢比較文学』第3号、1987）が取り上げる全104語の内、上記4品詞に属するものを総て対象とし、さらに太田辰夫、志村良治、朱慶之、程湘清、塩見邦彦等の成果を参考して同様の語を追加し、名詞35語、動詞36語、副詞55語、連詞（接続語）16語、計142語を対象とする。さらに、「国学宝典」「CBETA電子仏典」「敦煌変文校注」を利用して、使用典籍、年代、繁寡等を知る手がかりとする。これらを参照するのは、中国口語起源の二字漢語を取り入れた『日本書紀』の該当箇所の訓読の実態を解明に資するためである。

第一章最後の第四節では、調査に用いた『日本書紀』古訓点本の14種について、それら諸本と加点された訓点の年代・性格、依拠テキスト等を詳述する。資料として用いる『日本書紀』古訓点本は次の14種である。①岩崎本、②前田本、③図書寮本、④御巫本『日本書紀』私記、⑤北野本、⑥鴨脚本、⑦兼方本、⑧釈日本紀、⑨兼夏本、⑩丹鶴本、⑪熱田本、⑫兼右本、⑬内閣文庫本、⑭寛文九年版。平安時代の訓点は①～③の3種だが、①と②③とは系統が異なる。④はト部家訓点以前の神代巻の訓点を伝える資料として用いる。鎌倉時代の訓点は⑤から⑩の6種であり、⑦～⑨は鎌倉時代新興のト部家の訓点、⑤の鎌倉初期点及び⑥はト部家訓点以前の訓点である。⑩はト部家訓点に対抗する意図のある神祇伯家の訓点である。南北朝期の訓点は⑤の南北朝期点及び⑪である。⑤の南北朝期点は神祇伯資継王の訓点、⑪はト部家系の訓点を伝える。室町時代の訓点は、⑤の兼永点と⑫。いずれもト部家関係者の訓点だが、ト部兼方以来の伝統的なト部家訓点とはいささか異なる要素もある。江戸時代初期の訓点は、⑬及び⑭である。共にト部家系訓点の集大成の性格を持つ。

本論では、『日本書紀』の中国口語起源の二字漢語（名詞・動詞・副詞・連詞）の訓読を、二字一語として訓んでいる例（Ⅰ）と二字一語として訓んでいない例（Ⅱ）に分類し、Ⅰをさらに、一語の和訓として訓んでいる例（Ⅰ-1）と合符のみを加点している例（Ⅰ-2）に、

Ⅱをさらに、二字一語として訓まず和訓も不当な例（Ⅱ-1）と二字一語として訓んでいないが、文意は大きくは外れていない又は不明な例（Ⅱ-2）とに分けて、訓読の実態を検討する。

まず、第一節では、二字名詞 35 語の訓読例を検討した結果、34 語まで一語の和訓として訓んでおり、残る 1 語も『日本書紀』の文脈上誤訓とは言えず、二字一語として訓まず和訓も不当な語は皆無とする。次に、第二節では、二字動詞 36 語の訓読例を検討した結果、33 語まで一語の和訓として訓んでおり、二字名詞の場合と同様に二字一語として訓まず和訓も不当な語は皆無とする。他に、合符のみを加点している語が 1 語、二字一語として訓んでいないが、文意は大きくは外れていない又は不明な語が 4 語である。二字名詞の場合と同様に、学習の達成が口語起源の二字動詞にも及んでいたものと見做し得る。

第三節では、二字副詞 55 語の訓読例を検討した結果、二字一語の和訓として訓んでいる例が 11 語あり、量的には全体の 22% であるとする。二字一語として訓まず、和訓も不当な例は 4 語あり、量的には全体の 8% である。二字一語として訓んでいないが、文意は大きくは外れていない又は不明な例は 37 語、量的には 62% と大部分である。口語表現への理解が足らず二字一語として訓まず和訓も不当な例は 4 語、量的に 8% であるので、文意を取る上では大過ない訓法とも言い得るが、二字一語として訓んでいないが文意は大きく外れていない又は不明な例が 38 語、量的に 62% であることを併せて考慮すると口語表現を反映する訓法は構築し得ていない。第四節では、二字連詞 16 語の訓読例を検討した結果、一語の和訓として訓んでいる例が 8 語、二字一語として訓まず和訓も不当な例が 5 語（一部重複）、二字一語として訓んでいないが文意は大きくは外れていない又は不明な例が 5 語であるとする。副詞の場合よりは一語の和訓として訓んでいる語の比率が高いが、中国口語法を理解せず一語の和訓として訓まず和訓も不当な語も 5 語ある。また一語の接続詞としての訓読法を構築し得ていない語も少なくない。

結論では、『日本書紀』古訓に反映した、漢文学習及び訓読の性格をまとめる。『日本書紀』の二字漢語 142 語の訓読例を検討した結果、名詞・動詞と副詞・連詞とでは、大きく異なっている。二字名詞のほとんど、二字動詞の大部分が一語の和訓として適った訓み方がされていて、両品詞共二字一語として訓まず和訓も不当な例は一語も無い。これに対して、副詞・連詞（接続語）では、二字一語として訓まない例の方が多く、和訓も不当な例も相当数存する。名詞・動詞の如く概念を表す語の訓読は、中国語として相当に特殊な語であっても正確に訓まれている。これに比して、副詞・連詞（接続語）の訓読は、正確とは言い難い。これは訓読という学習作業の性格を示唆している。すなわち、名詞・動詞等概念を表わす語の学習では日本語で正確に理解することが期され、副詞・連詞等の学習では必ずしも日本語で正確に理解することは期されず、漢文の原表記を目で見て語意を補う一面もあったと推測する。『日本書紀』の訓読は、原則として字音訓みせず総て和訓訓みであったので、漢文訓読という学習作業の性格が鮮明に表われる結果となった、と結論した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 池 田 証 壽

副 査 助 教 授 加 藤 重 広

副 査 助 教 授 松 江 崇

学 位 論 文 題 名

日本書紀における中国口語起源漢語の訓読

『日本書紀』の諸本とその古訓を精査し、これに基づいて中国口語起源漢語の訓読の実態を解明したことは、着眼点・方法共に高く評価され、部分を構成する論文を全国学会・国際会議において発表した際も、高い評価を得ている。従来、訓点資料の研究は、多方面にわたって行われてきたが、中国口語をどのように理解し、それをどのような訓読として表現したのかという問題を正面に据えた研究は皆無であった。それは日本の訓点資料だけでなく、中国口語資料にも通じる必要があり、研究上の困難が大きかったからである。研究環境に恵まれたとはいえ、この困難を克服したのは本人の力量によるものであり、本論文の成果は、漢文訓読の研究にとどまらず、中国口語史研究にも貢献し得るものである。また、豊富な用例に基づく立論は、強い説得力を持つ。用例の豊富さ故に、分析の細部に粗さが残り、それは特に品詞の認定と語構造の分析に認められるが、これらは議論の材料を豊富に提供したものであり、今後の研究の深化と洗練がこれを補い、発展させるであろうと評価した。

以上のように、本論文は漢文訓読の研究を大きく前進させた成果と評価でき、当委員会は全員一致して、本論文を博士（文学）の学位授与に相応しいものと認定する。